

2011/05 近況

約 2 か月前の 3 月 27 日に計画されていた我々の今年の東京クラシックプレイヤーズのコンサートは中止せざるを得なかった。自肅はあまり考えていなかったが、計画停電のため電車の運行が極めて不規則な状態に陥り、メンバーが定時に集まれず、リハーサルを十分行うことが不可能になってしまった。いくら被災地への「勇気づけ」とは言っても、十分な練習をせずに単なる勢いで決行することは憚られた。残念だが今年は諦め、来年 2 月中旬に延期して行うこととなった。

震災後一週間の 3 月 19 日、3 日間の予定でシンガポールに行ったが、まだその頃は内外ともに、いったい何が起きたのか確実には把握されてなかったように思う。私の乗ったシンガポール航空の便も成田出発後、臨時に関西空港に寄港して運行された。4 月に入るとコンサートも各地で催されるようになり平常に戻りつつある、との印象を持った。

つい先日、5 月 10 日から一週間のスケジュールで所用のためヨーロッパに行き、ドイツでは親しい永年の友人達と出会って話をした。欧州では、今回ドイツのジャーナリズムが最も過敏に反応を示し、「原発は悪だ」との見解を喧伝した結果、政治的にもエコロジスト達のグループが勝利を収めてしまった。保守系の新聞さえもが原発否定を訴え、緑の党の独裁をも容認するようなニュアンスであったという。同じようなことは、ジャーナリズムに煽られて日本でも 2009 年夏に政権交代が行われてしまったので、今日、ドイツの国民について批判することは許されないかもしれない。私は個人的に多くの友人のいるドイツに好意的であるが、しかし 1933 年、ヒトラーも先ず選挙で当選してから、無分別な大衆に押されて次第に独裁的になり、ついには国民を大きな不幸へと導いてしまったことを想起せざるを得ない。

重苦しいムードの中でも、身近で明るく、暖かいニュースもあった。今回、親しい友人の中の数人が、テレビで一ノ関にある「ふじの園」というフランシスコ婦人修道会の運営する青少年保護施設の大きな被災状況を見て立ち上がり、約 6000 ユーロ（70 万円）の義援金を集めてくれた。私はその額をお預かりし、一昨日六本木の

同修道会支所にお届けした。所長のシスター・ツェリーナのお話では、ホームの再建は耐震構造で行うことが決まり1億円余りを要するとのことなので、この額では焼け石に水かもしれないが、私も今秋からチャリティーコンサートを開き、こつこつと支援できればと願っている。

今回の旅の道中では、今年のマーラー・イヤーズに因んで昨年河出書房から出された交響曲特集を読了した。この雑誌体裁の本は、内容的に充実していて大変勉強になった。特に栗津則雄の見解には大いに啓発された。G. マーラーのシンフォニーは、オーケストラの中で自分が演奏に参加していると大変気持ちよく、陶醉さえしてしまいそうになるが、聴衆の一人として聴くと気持ちをなかなか整理できない歯がゆさがある。この事に関しても、この本の中の複数の評論家諸氏のご指摘で、その理由を少し理解することができた。要するにマーラーの音楽には濃厚で甘美なロマン思潮と我々現代人にも通ずるグロテスクな精神症的側面が同居しているようだ。

私には、シンフォニーNo. 1 や No. 5 と並んで、20代半ば、バンベルク交響楽団コンサートマスター時代に、ヨーゼフ・カイルベルトの棒で「大地の歌」をフィッシャー＝ディースカウとヘフリガーをソリストに迎え、ドイツの各都市を演奏旅行したことが思い出される。この旅行ではABの二種のプログラムで、Bプロはベートーヴェン、ブラームス、ヒンデミットの作品で、Aプロは「大地の歌」であったが、自分の声を大切にするフィッシャー＝ディースカウが、毎夜ではなく一晩間を置いて二晩毎に演奏された。公演の回数を重ねる度に、ヘフリガー、特にフィッシャー＝ディースカウの解釈は、美しさと凄味を増し、そのステージの素晴らしさは今でも耳に残っている。指揮者カイルベルトは、歌手が楽に歌えるように、演奏効果をアップするため、特に金管楽器のパート等を随所で軽量化する大英断を行っていた。大演奏家は、作品の真の姿を聴き手に届けるためには手段も選ばぬ程の度胸が必要なのだと思ったことは貴重だ。若い時代に、あの歴史的な名演に参加できたことは、この上なく大きな財産であり宝物であると改めて思う。